



SEISHU WAY

SEISHU Senior High School
School Life Profile Paper,
SEISHU WAY vol.03 February 2021

2 月号

03

青洲高校学校通信

生み出すつながり
創り出すあした



発行 山梨県立青洲高等学校

〒409-3601 山梨県西八代郡市川三郷町市川大門1733-2 tel.055-272-1161/fax.055-272-1164

URL: <http://www.seishu.kai.ed.jp/> Mail: info@seishu.kai.ed.jp

発行日: 令和3年2月26日 編集: 青洲高等学校 広報委員会

「青洲文庫」扁額レプリカ完成

本校の校名「青洲」は、明治期にこの市川三郷町で私立図書館として地域の学問拠点となった「青洲文庫」に由来しています。「青洲文庫」は甲州の素封家であった渡邊家が3代にわたって収集した10万冊にも及ぶコレクションです。その書籍は大正13年に東京帝国大学（現東京大学）に譲渡され、現在も東京大学総合図書館に29,594冊が保管されています。また、伊藤博文揮毫の「青洲文庫」の扁額も寄贈されています。

このような歴史深い校名を身近に感じながら、文学に親しんだり科学を探究したりする生徒が増えるように、「青洲文庫」扁額のレプリカ制作を計画しました。昨年11月には逆瀬川校長先生を含む職員3名で東京大学総合図書館を訪問し、「青洲文庫」扁額の写真（撮影はプロのカメラマンに依頼）を収めてきました。この度扁額のレプリカが完成し、図書館に飾りました。



Seishu Bunko

各種コンクール入賞

本校では、各教科で学習した内容や日頃の生活で体験したことや感じていることをもとに、いろいろなコンテストやコンクールに積極的に応募しています。その中で、今年度次の4つのコンテストやコンクールで表彰されました。

輝く笑顔いちかわみさと
川柳コンテスト

男女共同参画
推進委員会賞受賞

「男女平等」

1年2組(商業科)

加藤 晴(市川中学校出身)

「性別は隔たりつくる かべじゃない」



私は、この句を考えている時に、日本ではそこまで男女差別があるとは言えないと考えました。それは昔と比べ女性の就職率も高くなってきており、格差が縮まってきていると思えるからです。社会にはフェミニズムという考えがあり、意見を述べる人々がいます。私は、その意見に賛成する人々と反対する人々の両者の意見が汲み取られる真の男女平等の社会の実現に向けた思いをこの作品に込めました。この句で受賞できたことはとてもうれしいです。

税に関する高校生作文コンクール

鯉沢税務署長賞受賞

「税金の大切さ」

1年2組(商業科)

新 ぎらり(芦安中学校出身)



消費税・所得税・法人税・固定資産税・自動車税など、約50種類もある税金を私たちは様々な場面で納めています。「税金はなぜ納めなくてはいけないの?」と思う人も多いかもしれませんが、もちろん答えは「私たちの国を良くするため」ですが、国を良くするために、どのように税金が使われているかという具体的な内容を知りたいのではないのでしょうか。なので「納めさせられている」と思ってしまうがちです。税金について興味を持ち、税金の使い方を知ることによって「させられている」と考える人が少なくなると思います。私自身、今回この税の作文コンクールに応募させて頂いたことで、「税金」に関して深く知ることができて良かったと思いました。

令和2年度贈りたい本大賞

大賞受賞

「ステキな贈り物」

1年3組(普通科)

都築 穂夏(六郷中学校出身)



今回、贈りたい本大賞という立派な賞を頂くことができるともうれしい気持ちでいっぱいです。贈りたい本大賞の応募にあたり、1番最初に頭にうかんだのが祖父でした。最近、祖父は体調を崩して元気がなかったので、少しでも元気になってもらえたらいいなという思いから祖父のために本を選びました。誰かのことを思いながらその人のために本を選ぶことが、こんなにもわくわくして、うれしい気持ちになるということを知ることができました。これからも、たくさんの本との出会いを大切に心豊かな人になりたいと思います。

ものづくりコンテスト

測量部門県準優勝

「チャレンジ」

1年7組(工業科)

藤原 百花(押原中学校出身)



私にとってものづくりコンテストは、違うクラスの人と話したり、使い方がわからない機械にさわったりなど、未知のことにチャレンジする「初めて」が多いものとなりました。最初はうまくいかず不安ばかりでしたが、みんなと一緒に練習していくたびに仲良くなり記録も上がっていきました。

大会では自分なりにベストを尽くしましたが、周りは全員3年生だったので、諦め気味で良い経験になるとしか思っていないかもしれません。その中で準優勝という結果が取れた時はめちゃくちゃ嬉しかったです。宮坂先生のご指導の下、このメンバーだったからこそ取れた結果だと私は思っています。来年は優勝し、関東・全国大会へ行きたいです。

校長室だより 3
[連載]

学び続ける
人間でありたい



青洲高等学校長
逆瀬川 慶浩
Yoshihiro Sakasegawa

学ばないものは、人のせいにする。学びつつあるものは、自分のせいにする。学ぶということを知っているものは、誰のせいにもしない。僕は、学び続ける人間でありたい。

これは、サッカーの「キング・カズ」こと、プロ生活が前人未到の36年目に入り、今年で54歳になる三浦知良選手の言葉です。三浦選手は、1月11日の契約更新の時に「サッカーに対する向上心と情熱は増すばかりです。今シーズンも、より多くの試合に出場し、チームの勝利に貢献することを目標に日々取り組んでいきたいと思っています。」とクラブのHPを通じて公式コメントを発表しています。

また、ある推理作家は、「できないと決めたら、本当に何もできない。だって、そう決めつけたら何もしたくないから」と語っています。三浦選手が、長期にわたってプレーしている秘訣は、「試合に出たい」という情熱を持ち続け、そして自分に限界をつくらず、いろいろな状況の変化に対応できるように学び続けている人間である結果だと思っています。昨シーズンは試合に出場しながらもノーゴールに終わっています。ぜひ今シーズンは、4年ぶりのゴールで最年長プロのゴール記録を期待したいと思っています。

さて、これからの未来を生き抜くのに大事なのが「非認知能力」と言われています。非認知能力とは言い換えれば、「前向きに生きる装置」「前向きに生きる能力」だそうです。認知能力である文字や数だけじゃなく、失敗から学ぶことが上手、人と協力できる、自分で考える、違う価値観を柔軟に受けとめる、新しい発想ができる、そんな力です。そこにも学びはたくさんあります。これからの時代は、今以上に変化がものすごく大きくなる時代だからこそ、一学生が続けることが必須になってきます。学ぶということとは楽しいし、必要なことだということを高校生のうちに体験しておく、変化の多い時代に対応できる力が続きます。生徒の皆さんには、そんな学びの土台である学びの楽しさという部分を味わいながら、学び続ける人間であってほしいと願っています。

ずっ~と、前から思っていました。 いつも、ハーモニに心が洗われます。

朝、7時00分、新校舎の中庭からソプラノの透明感のある歌が聞こえています。そんな毎日の一人一人の積み重ねが素晴らしいコーラスとなり、人を感動させるのだと強く思います。新型コロナウイルス感染症で暗くなっている心にぱっと大輪の花が咲きます。3年生が引退した新生音楽部が伝統を引き継いで、県芸術文化祭芸術文化祭賞、つまり、最優秀賞という素晴らしい成果を残しました。

芸術文化祭を終えて

田中 ひびき(市川2年 若草中出身)

昨年、11月3日に芸術文化祭が行われました。新型コロナ感染症の影響により数多くの大会が中止となってしまった中で、大会に出場できたことに感謝しています。そして、今回、1、2年生新体制の初めての大会で最優秀賞となる芸術文化祭賞をいただくことができました。今年は昨年と全く違う環境の中で練習を行ったりして、不安なことがたくさんありましたが、部員全員で乗り越え、このような賞をいただくことができ、大変うれしかったです。8月6日に和歌山県で総文祭が行われる予定です。支えてくださる方々に感謝の気持ちを忘れずに、山梨県の代表として堂々と演奏を行います。また、他校の演奏を聴き、さらにレベルアップしていきたいです。

決意

水上 このみ(市川2年 三珠中出身)

3年生が引退し、1、2年生のみの新体制で挑んだ芸術文化祭。3年生に助けてもらっていたことの重みを心から実感すると同時に、自分たち2年生が最上級生であることを改めて実感しました。しかし、そういった時に仲間と協力することの素晴らしさ、仲間がいることへの感謝を痛感しました。結果が強くなったことで、部員全員の「芸術文化祭賞」をとることができました。また、薬袋先生にはどんな時でも熱心に指導していただき、本当にありがとうございました。音楽ができる環境やいつも応援して下さる皆様に感謝し、これから行われる関東大会に向け練習に励んでいきます。

練習を重ねて

岩田 直樹(青洲1年 早川中出身)

11月3日に行われた芸術文化祭において、私たち音楽部は最優秀賞を受賞しました。結果は満足のいくものでしたが、そのような結果を出すことができたのも練習を重ねてきた結果だと思えます。練習の中では各パートの課題を少しずつ解決し美しく完璧な合唱を目指しました。また、「音楽をする」ということを練習から大会当日まで意識し、本気で音楽と向き合っていました。練習ではなかなか思うように歌えずつらい日もありましたが、それを乗り越え大会を迎えることができました。市川高校音楽部は伝統があり、様々な結果を残してきました。その伝統を私たちが必ず引き継ぐという思いで、これからの部活動に励んでいきます。

第一歩

小林 光(青洲1年 若草中出身)

今秋行われた芸術文化祭は、私たち1年生にとって最初の大きな大会でした。そんな大会で最優秀賞である芸術文化祭賞をいただくことができました。毎朝早く来て自主練をしたり、先生や先輩からのアドバイスを生かした練習をしたりしました。また、「1年生だから」という考えをやめ、意識を高め合うことで一歩を踏み出せたと思います。辛いことや大変なこともたくさんありましたが、そんな時に仲間の存在の大きさを、身をもって感じることができました。練習の成果が結果として出た時は喜びの気持ちでいっぱいでした。これからの大会や練習も掛けず、自分自身に負けないよう集中して取り組んでいきたいと思えます。





朝、昇降口から、「おはようございます。」とマスク越しの元気な声が聞こえてきます。バスケットボール部のみんなが体育館での朝練を終えて、大勢で下駄箱にやってくるのです。時々、ほうき、ちりとりを持って学校周辺の落ち葉などを掃いてくれています。プレイもすごいです。他でもがんばっているのです。学校で自慢の部活動です。新人大会優勝を成し遂げたバスケット部の二人に聞いてみました。

ずっ~と前から常連。チームでひたむきに頑張っています。

これからの大会に向けてのスタート

有井 慎司郎(市川2年 須玉中出身)

新人大会優勝までの練習で苦しかったことはどんなことですか。それをどう乗り越えてきましたか。

シュート力の向上です。一人一人が試合中に安定して決めるために、打つ時の指のかかりや下半身の力の伝わり方など、シュートの時の感覚をチーム全員で身につける努力をしました。また、お互いに打つ時に指摘したり、シュートの回数を増やしたりしたことで、精度が上がりました。

普段練習でチームとして大切にしていることは何ですか。

ディフェンス、リバウンド、ルーズボールを必ずすることです。プレイヤーがどんなにシュートが入らなかつたり、オフェンスが上手く機能しなかつたりしても、この3つのことは気持ちさえあれば誰でもできるという先生から言われています。それをチーム全員が深く理解して常に意識するように心がけています。

決勝戦を戦っている時の気持ちはどんな気持ちでしたか。

相手校には練習試合で何度も負けてしまっていたこともあり、絶対に負けてはいけないと思いながら戦いました。また、チームが今までしてきたことを徹底すれば、必ず勝ると自信を持って常にプレーしていました。

優勝したときの気持ちはどうでしたか。また、優勝できたのはどうしてだと思いますか。

相手校に勝ちきることができ、リベンジを果たすことができるともうれしかったです。また、この試合ではチームで16本のスリーポイントを決めることができ、自分たちのリズムを作り出すことができ、後半で点差をひろげることができたのが勝因だと思います。

これからの抱負を聞かせてください。

新人戦で優勝したからと言って、安心するのではなく、次の県総体に向けてしっかりと準備をして、今大会の課題を克服できるように今後の練習で改善すること、その次のインターハイ予選、ウィンターカップ予選では必ず優勝して全国大会に出場できるようにチーム全員で頑張っていきたいです。



初めての決勝戦での優勝

小池 凌太(青洲1年 田富中出身)

初めての決勝戦を戦っている時の気持ちはどんな気持ちでしたか。

高校の県大会での決勝戦は初めてで思うように動けるか不安も混ざって、緊張感がありました。でも、全員一丸となって絶対に勝とうという一体感を感じ、先輩達をはじめ仲間がいつも以上に頼もしく、試合自体も楽しく感じることができました。

優勝したときの気持ちはどうでしたか。また、優勝できたのはどうしてだと思いますか。

日頃の練習の成果が発揮できた試合だったこと、小中高とバスケットをしてきた中で県優勝という経験は初めてだったので本当にうれしかったです。必死に頑張ってきた練習と先生方の指導や心身ともにケアをしていただいていることが根本としてあったからだと思います。

これからの抱負を聞かせてください。

優勝とは言え、チームの目標は全国ベスト8なので、今回の大会で出た課題の修正と技術面、体力面の向上に努めていきたいです。「試合で戦う時間は短い。自分と戦う時間が勝敗を分ける。」この言葉を胸に、頑張っていきたいです。



校舎1階のフロアには写真部の作品展示スペースがあります。自然の風景、家族、友人、学校生活など、それぞれの瞬間を切り取った写真から、個性あふれる若きフォトグラファーたちのメッセージが聞こえてきます。

市川・青洲写真部は秋季審査会では団体総合優勝となり、県高等学校芸術文化祭写真部門では優秀賞2名、関東大会には3名が出場することとなりました。写真部の「キラキラ」がこれからも楽しみです。



ずっ~と、みんなの「キラキラ」を見つめています。



驚きと悔しさと喜びと期待

吉田 絢音(市川3年 城南中出身)

秋季審査会では上位常連校に勝てた。正直信じられなかった。市川と青洲が共同になって初の審査会でこの快挙だ。まさか自分が在学中に総合優勝出来るなんて思ってもみなかった。いろんな人に自慢したい。昨年度、自分の代表作とも言える作品が芸文祭で関東大会への出展作品に選ばれなかったことは本当に悔しかった。今年度、選ばれたときは嬉しいと同時に自分の作品や技量が関東でどこまで通用するのかとてもわくわくした。憧れた先輩たちにどれだけ追いつけているのか、先輩たちのようにかっこいい先輩になれているのか不安と楽しみが入り交じった気持ちだった。来年度から、私たちを超える後輩がたくさん出てくることをとても楽しみにしている。



活躍を来年に繋ぐ

近 優月(市川2年 三珠中出身)

私たち写真部は、芸文祭や季節ごとに行われる審査会に向けて、日々活動しています。今年はコロナ禍で、龍膽祭、総体など大切な行事が中止となり、生徒の皆さんの勇姿をカメラに収める機会が減ってしまい、例年のように撮影ができませんでした。そんな中、秋季審査会で“団体優勝”という素晴らしい賞を頂き、私自身も入賞することができました。部の一員として貢献できたことが、自信に繋がりました。また、芸文祭では3年生2名が優秀賞を受賞し、3名が関東大会へ出場しました。とても誇らしく、私も先輩方のような写真が撮りたいと強く思いました。来年は副部長として、部員の皆さんと一緒にさらなる飛躍の1年にしたいです。



写真部の一員として

新田 蒼斗(青洲1年 浅川中出身)

私たち1年生にとって高校生活初めての大会で不安や緊張がある中、先輩や先生方と相談しながら、最高の写真を選ぶことができました。自分の写真が選ばれた時はとても嬉しく、次の審査会では、今回よりもっといい賞を取りたいと思いました。先輩方の写真を見ると、とてもいい写真が多く、自分もこのような写真を撮りたいと思いました。先輩方は関東大会にも出場しているので自分も先輩方のようになりたいです。今後は私たちにも後輩ができるので、先輩として恥ずかしくないよう日々写真を学んで団体総合優勝や金賞を取れるように頑張りたいと思います。

吹奏楽のコンサートはいつも楽しみにしています。特に、演奏しながら、楽器を上下左右に動かしたり、ステップを踏んだり、聴覚と視覚を楽しませてくれ、生徒のみんなの一体感を感じる時間が楽しく、本当に大好きです。今日も放課後、龍胆館から吹奏楽の練習の音が聞こえます。心が元気になる吹奏楽部に感謝しています。2年生4名のクラリネット四重奏が金賞となり、県の代表として西関東大会に出場することになりました。4人の練習はまだまだ続きます。



ずっ~と仲間4人で一緒に いられる時間、大切な時間です。

県大会から西関東大会に向けて

塩島 優杏 (2年 田富中出身)

市川高校の代表としてアンサンブルコンテストに出場できることをとても誇りに感じている。本番へ向けた練習は日々充実していて一日一日がとても貴重な時間だった。曲の完成に向けて挑む課題はいくつもあり、出来ない自分に落ち込むこともあった。練習を重ねるごとに個人の完成度は増し、全体の一体感も高まっていった。迎えた県大会本番では個人的に悔いの残る演奏になったものの、金賞・県代表という成果をあげることが出来た。西関東大会に向けた課題が明確になり、本番に向けてさらに頑張ろうという思いが湧いた。同時に、これからも曲を練習出来ることに嬉しさを感じた。西関東大会では、最高の5分間だったと思えるような演奏にしたい。さらに、練習通りの演奏が出来るよう、落ち着いて臨みたい。

高みを目指す

大久保 真優 (2年 増穂中出身)

アンサンブルコンテストのメンバーに選ばれた時は、本当に嬉しかった。応援してくれた人の期待に応えるため、そして、市川高校最後のアンサンブルコンテストで良い成績を収めるため、日々練習に励んでいた。しかし、県大会では納得のいく演奏が出来なかった。そのため、西関東大会への出場が決まったときは、自分たちの実力が認められた嬉しさよりも、アンサンブルの練習を、このメンバーで続けられることの嬉しさの方が勝った。西関東大会では、より質の高い、自分でも満点を出せるような素晴らしい演奏をしたい。そして、一生に一度の大きな舞台を、目一杯楽しみたい。

楽しい舞台

田中 李佳 (2年 田富中出身)

アンサンブルコンテストへの出場が決まってから本番当日まではあっという間だった。何度やってもリズムがみんなと合わずに悩んだり、指摘されても上手くできずに落ち込んだりすることが多かった。しかし、私は練習が辛いとは思わなかった。その理由は、みんなでやりたいと言っていた曲だったことと、意見を出し合いながら練習ができたからだと思っている。金賞、そして西関東出場がわかったときは嬉しくて思わず叫んでしまった。県大会では納得のいく演奏ができなかったため、喜びきれない気持ちが少しあった。西関東大会では県大会のときよりもより良い演奏をし、心から楽しかった、やりきったと思える舞台にしたい。

最高の4人

渡辺 夏帆 (2年 身延中出身)

今までの練習は本当に充実したものだった。なぜなら、アンサンブルメンバー4人でお互いに気になるところを指摘し合い、修正していくことができたからだ。指摘し合うことができたからこそ良い結果を残せたのではないと思う。4人で息を合わせることはとても難しく、曲自体も合わせるのが難しいものだった。しかし、練習を重ねることで、徐々に合わせるできるようになった。

本番当日、いろいろなミスもあったが最後まで精一杯吹ききることができた。結果は金賞・県代表。この結果を聞いたとき、またこのメンバーで練習ができることがとても嬉しかった。西関東大会では楽しく、素晴らしい演奏をしてきたい。



「経験」「体験」によるものであったそうです。教授はお金を使うのであれば、モノではなく「経験」や「体験」に使ってほしいとも書かれています。

「お金があればあるほど幸せである。」と思ってる人は少なくないと思います。ある程度のお金は必要だとは思いますが、うれしかったり感動したりした「経験」や「体験」が「幸福度」のアップ、「幸せ」につながるのです。

高校時代に得た成功や感動の「経験」、「体験」は一生の宝となり、「幸せ」に生きるために必要なことなのです。生徒には若いうちに、多くの「経験」、「体験」をして、マイペースで少しずつ成功や感動を積み重ねていってほしいと思います。

さらに、「幸せ」になろうと、自分のために何かを求めすぎると、結果が他の人に左右されてしまうため、思い通りにならないことも出てきて、「不幸」に感じてしまいます。「自分が幸せになる」ためには、「他の人を幸せにする。」という考え方も大切だと思います。生徒には誰かのために行動し、その誰かが「笑顔」になることで、「幸せ」を感じる、そんな人生を歩んでほしいと思います。

ifで過ごした高校時代を
輝かせるために・・・。

生徒会長紹介

107ページの物語

望月 麗愛

(2年 六郷中出身)

「大切な仲間と
生徒会をつくっていこう。」

Q コロナ禍の中、感染者もなく運動会を成し遂げましたが、振り返って考えることはどんなことですか。

私が目指す市川高校を作るためのファーストステージとしての運動会を大成功に終わらせることができました。昨年とは人数の規模が大きく変わり、コロナ禍の中で対策を取りながらみんなが楽しんでくれるような企画を考え、それを実行することはとても不安なことでした。沢山のことに挑戦する分、やはり生徒会本部の中で苦労や葛藤が沢山ありましたが、私達なりに皆さんに楽しんでもらうために最善を尽くすことができました。成功のカギとなったのはやはり、全校の皆さんや先生方の協力です。改めて生徒会活動は皆さんなしではつukれないものだと思確信しました。

Q 望月さんは最後の生徒会長です。今、どんなことを考えますか。

私たちの代が最後で、再来年度からは市川高校の制服を着た生徒がいなくなります。来年度からは、4つの高校が一緒になり、同じ校舎で過ごすことになりませんが、全校で力を合わせればきっと、予想を超える素晴らしい1年間になると確信しています。だからこそ、皆さんと市川高校の伝統をとめることなくレベルアップさせて青洲高校へつなげなければなりません。もうすぐ107ページの市川高校という1つの物語が終止符を打とうとしています。そして、卒業生も含めて、人生で一度きりしかない市川高校での思い出が皆さんの心の中で色あせることなく光輝きますように…………。

令和2年9月29日に市川高等学校最後の生徒会長に就任した望月さん。コロナ禍の運動会では、市川・青洲高校の生徒のみんなから笑顔を引き出そうと、競技や運営の工夫をしたり、本番当日も、エネルギッシュに動き回ったりして、生徒にも先生にも楽しい笑顔の1日を提供してくれました。そんな望月さんに生徒会本部役員、それから生徒会長になろうと思ったきっかけや、これからどんなことをしたいのかなど、いろいろ聞いてみました。ifの残りの1年がifのみんなにとって「宝物」となるように、望月さんを応援していこうと思います。

Q 生徒会長になろうと思ったきっかけ(生徒会本部にはいるきっかけ)は何ですか。

人生で一度きりしかない、今ここ市川高校での生活が心の中で色あせることなく永遠に光輝いて欲しいと思ったことが1番のきっかけです。私は幼なじみの誘いで生徒会に入りました。中学校でも生徒会活動を通して沢山のことを学び、みんなのために何かを成し遂げることが出来る楽しさや、達成感がとても自分にとって誇らしいものだと思づくようになりました。何かを成し遂げることが自分にとっての強みや自信につながると思ったからです。

Q 目指す生徒会像はどんなものですか。

ひとりひとりが輝き誰もが英雄になれるような生徒会を作っていきたいです。もちろん、生徒会本部だけでは学校行事などをつくりあげることは不可能です。全校生徒ひとりひとりの協力が必要不可欠です。今ここにいる皆さんが力を合わせれば、想像もできないくらい大きな力に変わり、それがより印象深くかつみんなの思い出にしっかりと刻まれるような生徒会活動になると思います。みんなで協力することによって得られるものは何か、全校のみんなと一緒に学んでいきたいです。

校長室だより
【連載】70



市川高等学校長
小林 智
Satoshi Kobayashi

幸せに生きる

新型コロナウイルスの感染者が確認されてから1年2月ほど経過しました。その間、経験したことのない状況に対応する中で、「学校教育の意味」、「自分自身の生き方」など、物事を深く考える時間が多くなりました。特に、「学び」は将来人が「幸せ」になるために必要だという思いから、「幸せ」について深く考えるようになりました。

生徒にどんな時に幸せを感じるか、聞いてみました。「自分の好きなものを食べている時」、「友人とおしゃべりをして、仲良くしている時」、「部活動で苦しい練習を我慢してやってきて、大会でいい結果が出た時」、「疲れて帰って、家で好きな音楽を聴いている時」、「勉強でわからないことがわかった時」など、生徒は日々の生活の様々な場面で「幸せ」を感じているようでした。私も生徒と同様に「幸せ」を感じています。「おはよう」、「おはようございます」のやりとりをする朝から、学校の1日が終わるまで、生徒の「笑顔」を見るたびに教師として最高の「幸せ」を感じています。ある日、慶應義塾大学大学院の前野教授の「幸せ」について書かれた文章が目にとまりました。そこには、「ある金額までは収入が増えれば、それに比例して幸福度は大きくなるが、ある金額を超えてしまつと幸福度はほぼ変わらなくなつてしまつ」、「年収が2倍になつても、私たちの幸福度はたった9%しか上昇しないことがわかっている」と書かれていました。

また、前野教授が受講生に「これまでの人生を振り返って、うれしかったこと、感動したことは何ですか。」と質問すると、その回答のほとんどは

if
ichikawa family

いちかわファミリー

+ Classi
プラス

Spirit

苦しい時、辛い時、



仲間がいるから



新型コロナウイルスのおかげで、
多くの試練がいっぱいあったけど、
なんとか乗り越えられて来たのは、
ifのみんなの、明るい笑顔、優しい笑顔、
元気いっぱいの笑顔、いろんな笑顔のおかげ。
卒業する3年生だって、引き継ぐ2年生だって、
これからも頑張れるって思えるのは、そう、
どんときだって、いつも自分のそばに
ifがいるから。
ifがエールを送ってくれているからなのです。
そして、この1年、ifのみんなとともに
頑張れたことは私の大切な宝物、
一生の宝物だって、心から思えてくる。
そう、それがifなのです。



頑張れるんです。



70

市川高校学校通信

ICHIKAWA Senior High School
School Life Profile Paper
2 月号
ICHIKAWA Family vol.70 February 2021

発行 山梨県立市川高等学校
〒409-3601 山梨県西八代郡市川三郷町市川大門1733-2
tel.055-272-1161 fax.055-272-1164
URL. <http://www.ichikawa.kai.ed.jp/> Mail. info@ichikawa.kai.ed.jp

発行日 令和3年2月26日

編集 市川高等学校 広報委員会